

## ロンドンの後半生と「ひと切れのピフテキ」

芳川 敏博（京都府城陽市）

### はじめに

ジャック・ロンドン(1876-1916)の有名な言葉に次のようなものがある。

“I would rather be ashes than dust! .....The proper function of man is to live, not to exist. I shall not waste many days in trying to prolong them. I shall use my time.”

このようにロndonは、逆境にあっても常に全力で前向きに生き、人生の意味を探し求めている。この精神は「生命にしがみついて」によく示されている。ロndonは若い頃の複雑な家庭環境、過酷な労働、金採掘の失敗、離婚などのつらい体験を経て、再婚後、優雅な生活（ベストセラー作家、大農園、航海、豪邸）を手に入れる。しかし、晩年は病気やアルコール中毒、体力の衰えに悩まされ、ついに40歳で人生を終えた。この頃には、「生の掟」にあるように、生の有限性を認めるようになった。

ロndonの作品は人生と密接に関連しており、彼の分身が作品の中に登場することも多い。このようなことから、ロndonの人生哲学を知るためには、彼の作品を注意深く分析することが不可欠である。Lawrence I. Berkove は“Jack London’s Second Thoughts”というエッセイ（1999）のなかで、ロndonの作品を次の3つに分類し、一般的な評価とは異なり、後期の作品が特に知的で鋭く、芸術的にも極地に達していると述べている。

初期の作品群：極北や冒険もの中心で、テーマは若さ、勝者、愛、協調などが中心である。代表的な作品としては、『野性の呼び声』（1903）がある。

中期の作品群：社会的な作品である。

後期の作品群：借金が原因で悲観的になったり都会に嫌気を感じ始めた1900年代初めにも少し書かれた（「生の掟」：1901、「老人たちの結束」：1902）が、大半の作品は、『スナーク』号で世界一周の航海の途中で病気になり帰国した1909年以降のものである。テーマは、若さと老い、生と死、勝者と敗者。代表的作品は「ひと切れのピフテキ」(1909)、『マーティン・イーデン』(1909)、『ジョン・バーリコーン』(1913)などである。

中田幸子は『ジャック・ロンドンとその周辺』の中で、次のようにロンドンが「ひと切れのピフテキ」を書いた背景を説明している。( p.363 )

コルダーマーシャル (Calder-Marchall, *Lone Wolf*, p.162) によると『スナーク』号での航海中病気をしたことがきっかけで、ロndonは人間の弱さを実感として知り、短篇中の傑作の一つと言われる「ひと切れのピフテキ」(1909)を書いた。コルダーマーシャルは、「これはジャックが老年と衰えゆく体力の悲劇を認めた最初のものである」と言う。ここから、今まで見られなかったロンドンの精神的な衰えも始まるのだ。

以下にロンドンの後期の代表的作品の一つとして「ひと切れのピフテキ」を取り上げ、この作品とロンドンの後半生との関連を考察する。

### 「ひと切れのピフテキ」と主人公トム・キングの敗因

「ひと切れのピフテキ」という作品(1909)は、ロンドンの死生観の変化や現代の高齢化社会の在り方を考えるうえで大変重要である。主人公のトム・キングは、若い頃はプロボクシングのヘビー級チャンピオンであったが、40歳になった今は若いボクサーに最終的にノックアウト負けされてしまう。キングは敗

因がひと切れのビフテキも食べられない貧困にあると述べているが、もっと決定的な原因は老化であろう。

「若さ、強さ、豊かさ」というアメリカ社会の価値観の中で、キングは名前の通り若い時はまさに王様で、老ボクサー相手に連勝を重ね、相手の身になって考えることや負けることなど考えられなかった。老ボクサーになったキングは、それら全てを失ってしまった。空腹感や体力の衰えから試合に負けることを予感しながら、経験と知恵を生かし相手の油断をつき、食べるものがない妻と2人の子供のために試合に勝利し、ひと切れのビフテキを買うお金を得ようとする人生の悲哀が試合を通してリアルに描かれている。試合に負けることは、自分自身だけでなく、家族の死をも意味しているので、緊迫感が作品全体に漂っている。

ロンドンも、主人公のキングを通して人生と死を考えている。ロンドン自身も、プロの作家になってからはとんとん拍子で豊かな生活を手に入れ、肉体をさらに強くしようとボクシングも行ったようである。しかし、チャーミアンと再婚をし(1905)、『スナーク』号で航海に出た時(1907)がロンドンの人生の中で絶頂期であった。しかし、1908年に航海中に病気になり、オーストラリアに滞在することになったのが、ロンドンの人生の転換期であった。ロンドンはこの病気により、老化を感じ始め、精神的にも悲観主義になり、人生観・死生観が180度変わった。その翌年の1909年には「ひと切れのビフテキ」と、自伝小説『マーティン・イーデン』を書いている。この自伝小説の3分の2ぐらいまでは、マーティン・イーデンの成功物語が描かれているが、残りの3分の1は絶望を感じていく過程である。「ひと切れのビフテキ」はロンドンが33歳の時に書かれたが、7年後に彼は40歳で亡くなっている。主人公のキングが同じ40歳で実質的な死を迎えているのは、はたして偶然だろうか。このようにこの作品を丹念に読むことによって、プロボクサー・キングの本当の敗因だけでなく、作者の死生観の変化を知る大きな手がかり

になる。

トムは若いボクサーであるサンデルにノックアウト負けをした直後、試合の敗因について以下のようなことを回想している。

「思いかえすのは試合のこと、サンデルを敗北まぎわまでぐらつかせ、ひよろつかせていた時のことであった。ああ、あのひと切れのビフテキさえあれば、事足りたのに！ あれがなかったばかりに決定打が出せず、負けてしまったんだ。万事あのビフテキのせいだ。」( p.102 )

以上のような記述からすると、トム・キングの敗北がひと切れのビフテキも食べられないほどの貧困にあり、これも大きな敗因の1つであると考えられる。なるほど、ひと切れのビフテキを試合前に食べていたら、持続力が伸び、肝心な時に回復力が早まって、過去の経験と知恵を生かしサンデルに勝利していたかもしれない。しかし、長年のプロボクシングのための肉体の酷使や老化の蓄積のほうがより大きな決定的な敗北の要因である。作品の中には貧困の記述よりもはるかに老いについての説明の方が多い。

以下に老いがキングの決定的な敗北の原因であるという説明を血管の破壊を中心に取り上げる。

「手の甲は、血管が浮き出て大きく腫れあがっている。そして指の関節は強打され痛めつけられて、不格好になり、戦いのあとを証明していた。彼は、人の命はすなわち動脈そのものなどとは聞いたこともなかったが、その大きく腫れあがった血管の意味するところは十分にわかっていた。これまで彼の心臓は、この血管を通過して猛烈な勢いで、大量の血液を送りだしてきたのだ。この血管も、もう役に立たない。血管が広がり柔軟性を失ってしまうと、その膨張とともに彼の持続力もなくなってしまった。今ではすぐに疲れてしまう。もはや、目まぐるしい二十ラウンドを戦いぬくなど、とてもできはしない。」( pp.76-7 )

トム・キングは試合会場まで歩きながら、全盛時代と今の状態を考え、次のように若い頃に勝利した要因について述べている。

「これまで自分が片づけてきたのは老いぼれ連中だったのだ。自分は日の出の勢いの若者であり、彼らは下り坂の老年だった。道理で楽だったわけだ。彼ら老いぼれ連中は、すでに長い間戦ってきたことによって、血管は腫れあがり、関節は打ち砕かれ、体は疲れはてていたのだ。」( p.82 )

試合においては、キングは今までの経験と知恵を生かし、決定的な打撃を受けないために相手の強打をブロックしたり、クリンチなどを利用して体力の保持に努めて、ありとあらゆるテクニックを用いた。その結果、相手をノックアウト寸前まで何回も追いやった。

「第九ラウンドでは、一分間のうちに三度もキングの右フックがくの字にひねりを加えてあごに決まった。そして三度とも、サンデルの体はいよいよ重々しくマットに叩きつけられた。その都度カウント・ナインまで待って、立ちあがった。痛めつけられ度を失っていたが、それでもまだ元気だ。スピードが大分なくなり、前ほど力を浪費しなくなった。屈することなく戦っていた。が、相変わらず自分の宝である若さに頼っていた。キングの宝は経験であった。」( pp.94-5 )

しかし、若いサンデルも試合が進むにつれ、反撃に転じた。

「第十ラウンドが始まって間もない頃、キングは左ストレートを何度も顔面に決め相手のラッシュを止めはじめた。サンデルは用心深くなり、これに応戦して左を引きつけ、それから頭を下げてこの左ストレートをかわすや、右ロング・フックを相手の側頭部に打ちこんだ。少し高すぎて、相手を倒すほどの有効打ではなかった。が、最初それをくらった時、キングは意識不明になる際の、あの例の黒いヴェールが心におりてくるのを知った。一瞬、いや一瞬何分の一か、彼は意識を失った。」( p.95 )

そのうちにサンデルはボクシングのテクニックをキングから学習し、若さだけではない老獪さも身に付け始めた。

「サンデルが立ち上がった瞬間、キングは彼に向かっていったが、

放った二発のパンチのいずれも、ガードした腕に封じこめられてしまった。次の瞬間、サンデルはクリンチに持ちこみ、レフリーが懸命に両者を分けようとするところを、死にもの狂いになってしがみついていた。」( p.100 )

そしてついに、キングは疲労困ぱいのために、相手に一発のパンチもあてることができなくなり、試合をあきらめる心境になり、老いのために試合に負けることを最終的に認めた。

「やれるだけのことはやってしまったのだ。もうだめだ。若さが勝ちを制したんだ。クリンチしている間も、サンデルが元気を回復しているのが感じられた。……」

その時、あのグラブをはめた拳骨がぶちあたった。電気花火のような鋭い一撃を受けたかと思うと、同時にまっ暗なヴェールに包まれた。」( pp.101-2 )

### 「ひと切れのピフテキ」が提示するもの

ロンドンは「生の掟」( 1909 )で死を運命と受け入れているが、「生命にしがみついて」( 1905 )では最後まで死をあきらめない主人公を描いている。これらの2つの作品の考え方が、ボクシングの試合という形を変えて、「ひと切れのピフテキ」( 1909 )に生かされている。

この試合は「若さ・体力」と「知恵・経験」の闘いである。タイトルになっている「ピフテキ」は「若さ・体力」の象徴になっており、「ピフテキ・若さ・体力」がないキングはいずれ敗者になるということの伏線として使われている。この作品においては、老化や貧困のため若いボクサーに負ける可能性が高いということを知りながら、家族を守るために必死で今までの経験と知恵を生かして試合に勝とうとしている主人公の姿が描かれている。

しかし、やはり最終的には若さには勝てないと悟り、若い時の自分の傲慢さを羞じている。また、若い時には傲慢であった老ボクサーのキングは、若いボクサーに負けて涙を流した。以前ノッ

クアウトした老ボクサーが更衣室で涙を流していたのを思い出  
し、青春は因果応報で若い者もいつか老人になり、若い者に負ける  
運命であると悟り、人間的に成長する。

### ロンドンの後半生と「ひと切れのピフテキ」の意義

人生は誕生に始まり、成長、成熟、老い（病気）、死というサイ  
クルをとる。生まれることは自分の意思に関係なく偶然であり、  
成長・成熟は自分の意思によるものであるが偶然もあり個人差が  
生まれ、老い（病気）と死は自分の意思とは無関係に必然的なも  
ので、金持ちや貧困者に関わらず平等におこるものである。

中田は上記の著書の中で次のようにロンドンの人生観の変化  
を述べている。（p.364-5）

ロンドン自身「強壯で健康で幸運」（『種の起源』第3章  
の終わり、八杉龍一訳）で、いわば適者であると信じていた。人  
間は敵に対しては勝ち、荒野では生き残り、より良い社会を建設  
することができる、と信じていた。だが足許に迫った肉体の衰え  
をきっかけに、自分も含めてこの世界を逆光で見てしまうと、「強  
者の悲哀」や「勝者の空虚感」を感じるのみならず、「強者にも弱  
者にも」公平にやってくる病い、老い、死の現実の前に立ちすく  
むのである。

ロンドンは人生が体力＋精神力＋知恵＋運であり、最も重要な  
ものは体力であると考えている。若い頃は体力があり、よほど精  
神力・知恵・運がない場合以外は勝者となる。後半生では、ロン  
ドンは体力をはじめ、精神力、知恵、運に恵まれていた。しかし、  
強靱な肉体を誇っていたロンドンも1908年に病気になりそれ  
までと全く違う視点から人生や老いを考え始めたことが推測  
される。つまり、老いが始まると、体力がなくなり、よほど精  
神力・知恵・運がないと人生の勝者にはなれない。「一切れのピフ  
テキ」の主人公のキングは40歳と当時としては老齢で、その上、  
体力勝負の要素が大きいボクサーである。キングが試合に負ける

ことが前提になっている。

ロンドンがボクシングの試合を次のような点で人生にたとえている。

- 1) ボクシングには最終ラウンドがあり、人生も必ず死を迎える。
- 2) ボクシングには休憩をはさみラウンドがあり、人生にもいくつかの節目がある。それぞれの段階でいろいろな思いがけないことが起こる。休憩があるが、時が経つにつれて疲労は蓄積され、最終コーナーに向かう。

前半生的前提は人生は体力が優位であるのに対して、後半生はそれ以外の精神力や知力・運が優位にたつ。このように人生の段階によってその前提が全く異なる。重要なことは、若者は、老化が始まっている人の状況を実感しにくいことである。また、後半生を生きる人は、その前提を基にして発想の転換をし、前半生の価値観も含めて総合的に人生のあり方を考え直す必要がある。

体力の弱りはじめたロンドンは、トム・キングと同一視して「ひと切れのピフテキ」を書き、人生を悲観的に考えていると推測される。体力的には弱っているが、逆説的に考えれば人生のまさに黄金期に書かれたこの作品は、ロンドンの作品と人格の全体を理解する上で欠かせないという点で非常に重要である。

現代における老後は今までのものとは全く異なり、個性化すると予想される。この作品は、現代の高齢化社会における生き方を考えるうえでも、非常に参考になる。

参考文献：辻井栄滋訳『試合 ボクシング小説集』（社会思想社）  
中田幸子著『ジャック・ロンドンとその周辺』（北星堂）  
Lawrence Berkove, “Jack London’s Second Thoughts”